

イスラームの巡礼・参詣

—— エジプトの聖墓参詣を中心に ——

大 稔 哲 也

1. はじめに

ハッジ（メッカ巡礼）と、その他の聖地へのムスリムのズィヤーラ（参詣）

イスラームにおける巡礼・参詣について語る際、これまではハッジ（メッカ巡礼）のみが対象とされる傾向にあったことは否めない。確かにメッカ巡礼は信徒総体への義務であり、ムスリム／ムスリマ（イスラーム教徒）であれば、誰もが一生の間に果たしたい宿願である。その象徴的中心性は圧倒的なものであり、イスラームにおける六信五行（五柱）の一行（柱）に数えられることにも示されているように、教義における確固たる位置づけに異論はなかろう。しかし、かつてメッカへの遠路の移動は危険であっただけでなく、経済的、身体的に多くの艱難を伴う命がけの行為であった。とくに女性の場合、近親の同伴が義務づけられていたため、より困難は増したであろう。

それに対して、歴史的な実態を見ると、輸送手段の未発達な前近代においては、メッカ巡礼に勝るとも劣らぬ数の人々が、地元の聖所へズィヤーラ（参詣）に大挙して向かっていた。ムスリム居住地域の多くにおいて、現実にあまたの聖廟が建てられ、メッカ以外の聖域が形成されてきたのである。ズィヤーラとは、“訪ねること”を意味するアラビア語で、ある場所や人を訪問することを広く指す用語である。必ずしも聖地の訪問に限らず用いられ、一般の墓参や知人宅の訪問もこの語で示される。ただし、参詣の意にズィヤーラが用いられる場合、単に聖墓を訪問するだけでなく、墓前で死者に『クルアーン（コーラン）』を詠み贈り、祈願をするなど、一連の儀礼行為の総体を含意していた。

本報告では、メッカ巡礼や、それとズィヤーラとの関係にも目配りをしつつ、ズィヤーラの方を中心に述べたい。最初にメッカ巡礼の概略を追ったのち、ズィヤーラについてエジプトの事例を中心に話す。また、それによって、四国遍路とのより多面的な比較考察が可能になると考えられる。

イスラームの文脈での「巡礼」と「参詣」

では、ここでハッジ（メッカ巡礼）とズィヤーラ（参詣）との関係について、再度整理してみたい。イスラームの文脈では、メッカ周辺に赴き、カアバ神殿を周回するなど、所定の儀礼を実践することのみがハッジと称され、その他の参詣行為はすべてズィヤーラと呼んで区別してきた。究極の一神教としてのイスラームが、神の絶対性を強調して、その他の人間（預言者を含む）を神から峻別し、その結果として人間のあいだの平等性が構図として示されるのと呼応するかのように、ハッジはその他諸々のズィヤーラから厳しく区別されるのである。ハッジの位置づけが明白であったのに対し、ズィヤーラの方は、『クルアーン（コーラン）』やハディース（預言者ムハンマドの聖伝承）に規定の端緒も示されず、それどころか、多数のウラマー（学識者）によってイスラームから逸脱する行為として批判されてきた。しかし、多くのムスリムの社会で、これら参詣は在来の慣行や信仰のあり方を取り込みつつ、継続して広範にみられたのである。

また、これまで使用してきた「巡礼」と「参詣」という訳語も依然として問題をはらんでおり、検討を要する¹⁾。もし、巡礼を「いくつもの聖地を順次たどり経巡ってゆく旅」（小嶋博巳氏）と規定し、熊野や伊

勢に参る旅は「参詣」と言い習わしてきた日本語の慣用を顧慮するならば、“ハッジ（メッカ巡礼）”はむしろ“メッカ参詣”とすべきであり、エジプト死者の街の諸聖廟を巡ったり、各地の聖廟を旅して巡歴する形でズィヤーラしてきた前近代の慣行は、“巡礼”とすべきことになろう。つまり、現行の“メッカ巡礼”とムスリムの“聖者廟参詣”という表現を入れ替え、“メッカ参詣（参拜）”と“死者の街巡礼”などと変換する必要が出てくるのである。もちろん、メッカへハッジに往くといっても、実際はメッカ周辺の数ヶ所を移動して巡ったり、メディナの預言者廟を参詣することが往々にしてセットになっているという説明もあり得よう。また、前近代においては、メッカに至る途上にも、各地の聖廟に参りながら旅をつないでゆくのが常態であった。その意味で、メッカ“巡礼”と訳せないではない。

しかし、ここで確認しておかねばならないのは、日本語におけるハッジ＝メッカ巡礼とズィヤーラ＝参詣という訳し分けの経緯である。小嶋博巳氏も指摘するように、メッカ巡礼やサンチアゴ・デ・コンポステラ巡礼と言ったときの巡礼は、必ずしも巡歴する旅という意味に力点を置いていない。むしろ「聖地を訪れる宗教的な旅」、とりわけ規模が大きくよく知られた、日本国外の事例に適用されているように思われる。メッカ巡礼と言う表現自体は少くとも明治期には現れており、現在はすっかり定着していると言えよう。そして、報告者がズィヤーラ研究を始めた時点では、未だズィヤーラの日本語の定訳がなく、「参詣」や「巡礼」、あるいは「巡礼・参詣」などがあてられていたように思う。そのような状況下で、報告者がズィヤーラに「参詣」という訳語を付し続けているのは、「メッカ巡礼」という表現がすでに日本語の中に定着していること、そのうえで、ハッジをズィヤーラと峻別するイスラームの教義や、それを重視するムスリムの心性を、少しでも生かす必要があると考えたためである。すなわち、はじめに「メッカ巡礼」ありきで、それとの差異化を図るために、ズィヤーラ＝参詣としてきたのである。

同様の問題は、ズィヤーラを英語に訳す際にも生じる。欧米圏の学者はしばしばメッカへのハッジと同様に、ズィヤーラにも pilgrimage (pèlerinage など) という訳語を与えがちだが、これに対して、ムスリムの研究者はハッジとの区別がなされていないと反発するのである。

2. メッカ巡礼（ハッジ）

ここで、メッカ巡礼の一連の流れを略述してみたい。まず、メッカに入る前に、幾つか定められた場所（ミーカート）でイフラーム（巡礼衣）に着替える。「私はここに居ります。おお神よ。・・・」などとタルビヤの文句を唱えながら、ヒジュラ暦（イスラームの暦）の12月8日までにメッカ入りし、聖モスク内のカアバ神殿を、時計の逆回りに7周回（タワーフ）する。そして、黒石とカアバの扉のある南東の一角（ムルタザム）で祈願し、イブラーヒームのマカーム（御立ち所）近くで2ラクアの礼拝をする。次いで、ザムザムの泉の水を飲み、サファーとマルワという2つの小丘間を7回往復する（サアイという早駆けの行）。8日の夜はメッカ郊外のミナーの谷、もしくはアラファで過ごす。翌9日正午までに、アラファに到着し、そこで悔い改めてウクーフ（立礼）儀礼を行なう。日没後、巡礼者はアラファとミナーの間にあるムズダリファに向かい、一晚を過ごす。10日の朝にはミナーへ戻り、悪魔の石柱に7個の小石を投じる。そして、ラクダや羊を供犠し、イフラームを脱ぐ。その際、頭髪を剃るか、一部を切る。その後、2・3日ミナーに留まり、3本の石柱に石投げする。出発前にまたカアバ神殿のタワーフをする。さらに、希望者はメディナの預言者（ムハンマド）廟へ参詣に向う。

しかし、これだけからでは、メッカ巡礼者の実態や心性は窺えない。そこで、巡礼者の様子を活写した中世の旅行記から一例を紹介しよう。イブン・ジュバイルは、1183年に故郷のグラナダ（現スペイン・アンダルシア）を発ち、メッカ巡礼に向った。彼の旅行記は、その後のイブン・バットウータの大旅行記などに多

大な影響を与え、頻繁に引用された。以下は、カアバ神殿での出来事である。

「9月9日のことであるが、神が海から湧き上がる雲をお創りになった。その雲はシリアの方へ向って進んで来て、神の使徒が言われたごとく、豊かな雨を降り注いだ。それは午後の礼拝後の夕方であった。人々はヒジュール（神殿北西部の半円形壁）へ急ぎ、着物を脱いで祝福された雨樋の下に立ち、大変な混雑の中で、雨樋から溢れ出る水を、頭や手や口で受けていた。ものすごい喧騒が起こった。各人は神の恵みの分け前を体で受けたいと望んでいた。祈願の声が上がり、敬虔な人々は涙を流し、祈願のざわめきと啜り泣きの声しか聞こえなかった。女達は目に涙し、敬虔な心でそれを見ながらヒジュールの外に立っていたが、出来ることなら、その場所へ行きたいと望んでいたのである。

（神の）報償を願って、心優しい巡礼者達のある者が、自分の着物をその祝福された水で濡らして、女達の所へ行って、何人かの手に絞ってかけてやっていた。彼女達はそれを受けて飲んだり、顔や体に擦り付けたりしていた。（イブン・ジュバイル『旅行記』藤本勝次・池田修監訳96頁。変更箇所あり。）

また、ブラック・ムスリムズとの関わりや、その生涯が映画化されたことでも著名な、アメリカ合衆国のマルコム X は、1964年に巡礼先のメッカから手紙でこう書き送っていた。

「私がこんなことを言うと、あなたにはショックかも知れないが、私とは常に事実に顔を向けて新しい経験と知識が押し開く人生の真実を受け止めようとしている人間である。この巡礼の経験は私に多くのことを教えてくれ、聖地で過ごした時間は私の眼を前よりも開かせてくれた。私は眼の色が青より青く、髪の色が金髪よりブロンドで、肌は白よりも白い人々と一緒に皿から食事した。そして、ナイジェリア、スーダン、ガーナのアフリカ系ムスリムに感じた真摯さを“白人の”ムスリムの言葉と行為の中にも感じた。（D・アレン編・東郷茂彦監訳『マルコム X：最後の証言』扶桑社、290頁。）」ここでも、人種や民族、国籍、肌の色の違いを超えた人間の平等が高らかにうたわれている。これこそ、イスラームが多くの人々の心を捉えている理由の1つである。

このようなメッカ巡礼ではあるが、今も昔も、異教徒には開かれていない。この点、現今の四国遍路と好対照をなしている。したがって、日本語や欧米語による多くの研究書が、さもメッカ巡礼に行ったかのように記述しているのであるが、実際は肝心のところの描写をほぼ引用に拠っている。そのような中で、自身もムスリムへ改宗して、カアバ神殿へ入って撮影を敢行した写真家・野町和嘉の『メッカ』（岩波新書）は、写真ばかりでなく、文章においても圧倒的迫力に満ちている。

3. 参詣（ズィヤーラ）

ムスリム社会におけるズィヤーラの展開

イスラームの草創期において、ズィヤーラは教義の埒外にあったのではなかろうか。むしろ、それまでアラビア半島で盛んであった偶像への巡礼・参詣を否定する形で、イスラームが始まったと考えられる。その後、ムスリム勢力がキリスト教徒・ユダヤ教徒の多数居住する地域を次々と支配下に収め、そのままの信仰に留まり続ける者たちを支配し、同時にそこからのムスリムへの大量の改宗者を抱えるに至り、既存の諸宗教の慣行や信仰内容からの影響を徐々に滲ませていったと推測される。

ムスリム諸勢力のうち、ズィヤーラをその教義に取り入れて体系化しようとする最初の試みは、シーア派の人々によってなされたと考えられる。彼らは、おそらく8世紀頃には、歴代のイマーム、なかでもフサインの墓廟へのズィヤーラを奨励する理論を整え、大規模に実践していった。現イラク南部の諸聖地、カルバラなどへは、現イラン北東部、イエメンなど遠路から、シーア派の人々が参詣に蝟集していた。また、彼らの奉ずるハディースには「・・・フサイン墓参詣の遂行は課されたものである」「アーシューラー（フサ

イン殉教の日)フサインの墓を詣でるものは、メッカ巡礼する者に等しい」というものまで存在した。ときのアッバース朝政府は、これに対して厳しい弾圧で臨んでいる。

その後、ブワイフ朝(932-1062年)やファーティマ朝(909-1171年)など、シーア派を掲げる王朝が西アジアの中枢地域を支配するようになると、それに対抗するように、スンナ派の人々の間にもズィヤーラの慣行が広まる。しかし、エジプトの事例を見る限り、ファーティマ朝による支配以前のスンナ派王朝のもとで、おそらくすでに参詣慣行は端緒を見せていたことであろう。

12世紀以降、ズィヤーラの慣行は聖者崇敬、スーフィズムの普及とも共振する形で諸ムスリム社会に定着し、諸都市の聖廟を巡歴してゆくズィヤーラ旅行の形式も見られるようになる。また、エジプトのように、集団参詣(群参)で知られるところも出てきた。しかし、これがいわゆるワッハーブ運動を経て、近代に入り各地で急速な変貌と衰えを見せるようになる。現在、全般的には、ズィヤーラがかつてのような活況を呈してはいない。

エジプト死者の街の参詣

今回、取り上げるのは、エジプト・カイロの郊外に展開する「死者の街」と通称される広大な墓地群へのズィヤーラである。そこには、ムスリムの「聖者」や、預言者ムハンマドの後裔、歴史上の著名人らを祀る聖廟が林立しており、とくに12世紀以降、おびただしい数の参詣者を迎えていた。死者の街の規模と人口は、それだけで当時のヴェネツィア全体に匹敵したと言われる。ヨーロッパからの旅行者は「この荘厳さをヨーロッパ・キリスト教世界に見たことがない」と驚嘆していた。

現在、この墓地区は150万人と言われる住民を抱えていることでも良く知られている。住民は通常、墓の持ち主一族とは無関係であり、手配師に斡旋されて居住しているだけである。墓主一族の方は、貧者に軒を貸すと言うこの善行によって、天国に死後入りやすくなると考えている。墓参に訪れる際には、一時、住人に席を外してもらうことになる。カイロの墓地は、一般に各墓区ごと高い壁に囲われ、参詣者用にトイレや台所を備えているものもあるため、住居に転用しやすいのである。また、エジプトの社会問題であるスラムとは、一般にこの墓地区外部の、より劣悪な住環境を指す。墓に住めるだけまだ良い方なのである。

この死者の街の聖性の背景として、古代から聖山として畏敬の念を持たれて来たと推測されるムカッタム山の裾野にこの場所が位置することが重要である。死者の街参詣は、ムカッタム山参詣とも呼ばれていた。ムカッタム山での祈願は叶いやすいとされ、ムスリムのスーフィーや聖者、コプト・キリスト教徒の修道士達が、ここに籠ったり、山野を放浪して、修行に励んでいたのである。

死者の街の参詣者は、君主から庶民まで、すべての社会階層を含んでいた。彼らは個々人によって参詣するだけでなく、その場限りの参詣グループ(ターイファ、講)を結びつつ、墓地のツアー・リーダーとでも言うべき「参詣のシャイフ(先達)」に引率され、シャイフお得意のコースを巡回していた。シャイフは特定の墓のもとに立ち止まり、故人の事績や美德を解説し、集団祈願を率先していたのである。15世紀には、同時に11のグループが死者の街参詣に出ているとの記録すら見られる。また、とくに祈願(ドゥアー)の叶いやすい七聖墓を巡ってゆくズィヤーラも盛んであった。参詣先の墓廟は、参詣者を参籠させていたし、ワクフ(寄進財)を通じて、参詣者に手当金が支払われていた事例も確認できる。死者の街では、大量の参詣者が多額の御布施(サダカ)を行ない、畜獣を屠って肉を分配したり、パンなど他の食料が配給されていた。「それゆえ、人々はそこへ住みたいと欲していた」とすら史料は述べる。この状況と、四国遍路における「お接待」との比較は可能であろうか。

また、参詣のシャイフたちは、この死者の街参詣のいわばガイドブックを書き残していた。それが、『参詣の書(クトゥブ・アズィヤーラ)』と呼ばれる一群のテキストである。その中には、参詣に携行される

ようにと明記されたものもある。参詣書は、当時のムスリムの参詣・墓参慣行、他界観、聖者崇敬、口頭伝承などに関する情報の宝庫たる史料と言える。

参詣の慣行

参詣書によると、参詣者は墓地に出入りする際に、生者に対するのと同様に死者へ挨拶し、死者に『クルアーン（コーラン）』を詠み聞かせていた。『クルアーン』の中でも、とりわけヤースィーン（第36）章は墓地で死者に対して詠まれたものである。この点は、般若心経との対比も興味深い。そして、墓前などで祈願を行ない、花や香草、金銭、御香、ロウソクなどを供えていた。ロウソクやランプの献灯も盛んであった。これらの祈願が成就すると、先の祈願を行なったときの誓い（ナズル）に従い、お礼参りに来る必要があった。今日、各地のムスリムが祈願に際し、白い布切れを墓廟の柵や脇の樹木に結びつける慣行も頻見される。

墓を手で拭いて身に擦りつけたり、墓土を葉として用いる慣行も広がっていた。また参詣書には、墓に腰掛けていた男女が、墓中の故人に注意されると言う例すら見られる。参詣者はしばしば墓廟に参籠したり、墓地で夜を明かしていた。それによって、夢の中で故人や聖者・預言者と関われるのも、重要な狙いであった。焚香も盛んな慣行であった。彼らは多種の香を参詣前に身に薫き込めていたり、墓地で焚いていた。

墓地では、基本的に大笑いや歌舞は避けるべきと、学識者は繰り返していたが、慎ましくあるべき死者の街では、ウード（リュートの語源ともなった弦楽器）を抱えた弾き語りアラブの英雄叙事詩をうなり、カワール（宗教歌手）による宴、説法者による宗教説話、歌うように過剰に節をつけたコーラン詠み、集団で神の称名に踊るスーフイーなどがみられた。夜間まで、家族連れが飲み物や菓子を携え大挙して憩う、「エジプトで最も人気のある行楽地（14-15世紀の歴史家マクリーズィー）」となっていたのである。すなわち、ピラミッド見物よりも、死者の街の行楽の方が好まれていたのである。傍らでは、支配者層が、墓廟の建築祝いなどのたびに、大々的な喜捨を行ない、民衆も死者の街で行なわれる荘厳なパレードや軍人のボロ競技などを見物できた。

墓地での礼拝（サラート）は、神ではなく被葬者の方を拜んでしまう危険性があるため、禁止が原則であった。墓廟建築そのものや、その華美化、さらには生前墓の建設も、学識者から厳しく指弾され続けていた。しかし、実際の死者の街は荘厳な墓廟建築や、墓地内のモスクで名を馳せていた。また、墓地は女性が夜遅くまで自由に出歩ける稀な場所であったため、「女性が不良の若者と混交」する溜まり場として、社会問題化された。このあたりの内実を雄弁に物語る史料の一つが、参詣書に見える参詣の作法（アダブ）20則である。以下引用すると、

第1則。意図の純正なること。故人を参詣せんと思う者は、心の腐敗を正し、死者のもとで『クルアーン（コーラン）』を詠み捧げたり、祈願してやるなどして奉仕するのであり、参列によって死者の家族・近親者の虚栄心をくすぐり、それによって自分の親族に死者が出たときに参詣に参加してもらおうとしてはならない。これが今日（12-13世紀）、大方の人々の有様であるが、虚飾や虚栄心は除去されるべきである。

第2則。参詣は金曜日に行う。ただし、多くの者が水曜日の参詣を好むのにも一理ある。

第3則。墓の上を歩いたり、そこへ腰掛けることは避けること。

第4則。預言者たち、教友たち、（預言者ムハンマドの）近親者（の墓）を目指すこと。

第5則。死者の顔に向かって来て、立ち止まってメッカの方角を背にして死者と対面する。そうすれば、汝は参詣において、故人が生きていて対話するような形になる。

第6則。死者に挨拶せよ、その死者を参詣する生者に挨拶するように。

第7則。墓に触れたり、接吻したり、その表面を拭いたりして、アッラーの祝福を得んとするのは慎むべきである。

第8則。詠誦について言えば、墓へ『クルアーン』を詠んでやることは構わない。

第9則。被参詣者への祈願。なぜなら、祈願は参詣者から死者への贈物である。

第10則。墓地の間で預言者ムハンマドを讃えること。

第11則。参詣者は預言者たちや聖者たちの墓で、自らのために祈願するがよい。

第12則。死者の良き話が、その墓では望まれる。

第13則。近親者（の墓）への参詣を多くすること。

第14則。近親者の墓を見るとききの辛抱について。

第15則。泣き叫んだり、頬を打ったり、衣服を引き裂いたりするのをやめよ。

第16則。兄弟、友人の墓の脇に座し、『クルアーン』を詠誦してそれを贈り、到来と退出の際に挨拶すること。

第17則。自分の敵たちの墓を見ても、悪意ある喜びを慎め。

第18則。墓地では笑いを避けよ。というのは、この場では（静かに）泣くことの方がよりふさわしいからである。

第19則。墓地で礼拝せぬこと。

第20則。墓は平坦にし、小石をおいてやるがよい。

なかには、日本で暮らす我々も身につまされるような感情の機微を描き出している部分があるのではなからうか。また、歴史民族誌史料の一部としても、貴重である。

参詣の目的と祈願成就（イジャーバ・アッ・ドゥアー）

参詣者たちは何を希求して、参詣に勤しんでいたのであろうか。その一端は、彼らが墓地で行なった祈願の内容から窺い知ることができる。それらは、病の平癒、経済状況の回復、死後の天国入り、護身、罪の許しを乞う、着衣を求めて、戦争勝利、処女のままで死、墓所に他者を埋葬しない、死者への贈物、巡礼の無事安全、ペストの終熄、ナイル川の増水、墓から出た故人の足が隠れるように、などであった。なかでも、病の平癒や借金帳消しという現世利益と、死後の天国入りが渴望された。

ところで、これらの祈願の際、イスラームにおいて強調されたのは、祈願を叶えるのはあくまで神（唯一神アッラー）であり、墓の中の死者・聖者は「とりなし（シャファーア）」を行なうに過ぎないという点である。ここにおいて、イスラームの一神教的な性格は曲がりなりにも保持されてきたのである。墓中の被葬者（聖者）が参詣者の祈願を直接に成就させてしまうのであっては、神の全能性が損なわれてしまうのである。

民衆と支配者層にとっての「死者の街」

エジプトの民衆は、単に死者の街を巡って、祈願に明け暮れていたばかりでなく、様々な形で積極的に墓地区の拡大や墓の創出に参画していた。エジプトにおける聖廟には、被葬者のはっきりしていたもの以外に、故人の頭骨や聖遺物によるもの、夢に基づくものもあった。さらに庶民は盛んに墓碑を書き換えたり、新たな聖墓を創出／捏造していたのである。彼らは、一般人の墓を著名聖者や預言者ムハンマドの一族、歴史上の有名人などの墓へと換えてしまうのであるが、それらは全て無根拠であった。なかには、玉葱商のムスタティルの墓を、カリフのムスタンスィルの墓へ換えてしまった例すら見られる。しかし、逆にそこからは、付託された民衆の願望を読み取ることが可能となろう。

また、支配者層にとっても、そこは彼ら自身の祖先の墓所であるため、参詣や喜捨、建築の場所となっていた。そればかりか、荘厳な聖域であったため、彼らの集団祈願や、宴・パレードの舞台としても活用され

た。ポロなど、軍事訓練を兼ねた騎士の遊戯の場でもあり、巡礼興の巡回の際に死者の街で行われた槍兵の遊びは、民衆との重要な接点となっていた。さらに、王朝政府の中枢たる城塞の周囲に展開していたため、死者の街は支配者層の政争の場ともされた。軟禁や潜伏の場、処刑や抗争、暗殺が横行する、彼らの庭と化していったのである。史料によると、殺してすぐ埋められると言う利点もあった。

以上のような場所であり、全社会階層が混交する死者の街は、支配権力にとって統御すべき要所となっていた。マムルーク朝政府は墓地区カラーファに総監（ワーリー）を任じ、統括にあたらせた。また、人気を集めた聖者廟についても良く調べてみると、支配層による経済援助や整備が、参詣者の多寡に大きく影響していたことが窺える。すなわち、支配権力との関係も重要な論点である。

聖者のカラーマ（奇蹟・美質）

ここで、イスラームにおける「聖者」を聖者たらしめていた、聖性の根拠について付言するならば、まず聖者のカラーマ（奇蹟・美質）が挙げられよう。史料によると、それらは、ある物質の質を変換してしまう変質の術（*inqilâb al-a'yân*）、創出術、水上歩行、海割け・海縮小・枯渴、空中浮遊・乗雲、地面収縮（*tayy al-'ard*）、瞬間移動術、偏在などであり、渇水譚や異類譚、治癒譚の中にも示されていた。また、予言・予見、透視能力、テレパシー、不在の探知、死者の世界との交流、死後の奇蹟、呪力（念力）、護身、ジン（精霊・妖霊）・ヒドル（緑の男）などとの交流、壁・戸開けなどもカラーマに加えられる。

さらに、ムスリムの聖者は寡黙・謙虚であり、笑いを慎み、しばしば涙し、芳香と光を発し、不眠で粗衣をまとして世間から孤絶しがちであった。学識を有し、イスラーム的善行を積み、改宗譚・改悛譚・食物譚・金銭譚・性譚の主であった。

4. おわりに

以上のように、中東・ムスリム社会の参詣の実態は、四国遍路やアジア各地の参詣・巡礼行との比較を可能にする多くの要素を備えていた。報告者のような中東の参詣研究者にとっても、四国遍路研究との比較は、これまで行なってきたキリスト教巡礼研究との比較とは異なる視角から、多くのヒントを突きつけてくれるものであった。また、日本の巡礼・参詣研究の豊かな蓄積を生かさぬ手はないであろう。なお、講演では、スライドやビデオを併用して、預言者ムハンマドの“聖足跡”や墓参用の花屋、墓地を巡るコーラン詠みなども実見していただいた。今回はムスリムの事例だけをお話したが、中東やエジプトにおいてイスラームは他の諸宗教（キリスト教・ユダヤ教など）と共存しつつ、重層的に互いの慣行をやり取りしてきた。このあたりの説明まで、時間が足らなかったのは残念であるが、またの機会に譲りたいと思う。

- 1) 小嶋博巳氏の「遍路と巡礼——その構造比較——」（本研究プロジェクトチームの平成15年度愛媛大学国内シンポジウム・プロシーディングス『四国遍路と世界の巡礼』所収）に示唆を得た。また、近刊の『民俗小辞典: 死と葬送』（新谷尚紀・関沢まゆみ編、吉川弘文館）の「巡礼」の項目（真野俊和著、351-352頁）においても、巡礼は「複数の宗教上の聖地をつぎつぎに参詣していく行動」と規定され、「旅行形態もその社寺をめざした往復運動が基本になる」という参詣と、差異を対照されている。